

書物を読んだならば普通の常識を養成することが出来るであろうか、所謂普通の人間として議論することが出来るのであるか、中學を卒業すれば其れで宜い。先づ今日の中學が昔しの四書五經に當ると見て宜いが、是れとても亦必しも充分でない。隨て普通の紳士として如何なる事を知つて居ればよいかと云ふことが是れが大なる問題である。普通の紳士となるには、やはり多少種々なる方面の書物を讀まなければならぬのである。自分の見る所では、先づ第一に修養の書物である。是れには今日の人の書いた物でもよいけれども、又漢籍或は佛書を讀むべきである。漢籍の方で云へば老子、莊子の如きを讀んで居れば意見は立つ。佛書で言へば般若心經、金剛經の如きものを讀んだらば宜い。第二には法律上の知識が必要である。法治國民

ては法律を知らなければならぬ。憲法の大意の如き是非共之を知る可きである。第三には科學の思想である。物理や化學等の知識は普通に之を知つて居らなければならぬ。中學を卒業した者であれば特別に之を學ぶ必要はない。第四は西洋に於ける主なる學者の名である。近代のイブセンとかブラウニングとか云ふ様な人の名前だけは承知して置く必要がある。専門的の事になれば數限りのかゝることであるが、先づ常識として此様な事を吞込んで置くがよい。

水 人民と土民 昔しは土民と云ふ言葉があつた。例へば三輪執齋先生が近江の小川村に行いて土民を集めて王陽明の學を講じた所が土民皆感泣して藤樹先生の再來と稱したと云ふことが或る書に書いてある。此文を書いた人が悪いのであるか如何は知らぬけれども、日

本の人民の事を土民と書いてある。今日各地に講演會講習會若くは講話會などが開かれるけれ共、若し新聞紙が土民の集合と書いたならば如何であらうか憤然として怒るであらう。又世間も許さないであらう。吾人を以て見ても實際穩かならぬ様に思はれる。併ながら古代に於ては土民と云ふても怒らなかつた。又實際に土民と云はれても仕方がないと思ふて居つたのである。それ已ならず。土民と云ふのが當つて居つたのである。如何となれば當時の人民は前後左右の見さかひも付かない、唯々渾沌として其日の生活を送つて居るのみであつた。常識もあく世間も知らない。極めて憫れなる者であつた。土民と云はれても成程と思ふて居つたのである。今日の人民は是れと違つて居る。總て世間を知つて居る。尋常小學校を卒業すれば既

に日本には如何なる偉人が居つたかと云ふことを知つて居る。世界には如何なる偉人が居つたかと云ふことを知つて居る。ナポレオンも知れば、ビスマルクも知る。西郷南洲も知れば、中江藤樹も知る。二宮尊徳も知れば、伊藤仁齋も知る。種々様々ある事を知つて居る。知識の程度は低いとは云ひながら所謂常識が發達して居る。其知識は謂はゞ神天に通ずると云ふ様な状態である。隨て演説する人に對しても彼は如何なる人物であると云ふことを能く承知して居る。如何なる方法に依つてあの位置に達したのであるかと云ふことを善く知つて居る。早く言へば、彼と我とは唯々境遇の違ひである。勉強と否との違ひである。同等の人間であると云ふことを知つて居る。であるから如何なる偉人に對しても聖人だと思ふことはない。今日の人は一般

に俐巧になつて來た。平等に發達して來た。士民と云ふ言葉が不穩當であると思はれるだけ其れだけ遙か日本の社會が文明になつたと云ふ事を示して居るのである。此傾向は是非共増加させたい。唯々日本の青年讀書子が書物を勉強する事に於て良き方法を得れば則ち其れだけ遙か日本の精力を利用することになる。自分も此方面に就いては長い經驗があるから聊か感ずる所を叙して以て参考に供した。いと思ふたのである。

讀書法 終

附 錄

○學を講ずるは精深を尙ぶ。蓋し初學の知る所、俗學の記する所は其皮膚に止まるのみ。君子の知る所は皮より肉に到り、肉より骨に到り、骨より髓に到る。其間幾重の界限を隔つるを知らず。然れば則ち之を百にし之を千にするの功闕く可らず。此れ所謂深く之に造るに道を以てし、其自ら之を得るを欲するや必ず此の如し。而して後漸く精微の處に到るべし。其力を用ふる彌々精しければ即ち其の道に造るや彌々深し。苟くも此の如くなる能はず、一たび視て而して即ち止む者は膚淺鹵莽の學にして未だ深奥の地に到る能はず。何ぞ以て自得すべけんや。苟くも學にして自得すること能はずんば、即ち是れ口耳

の學にして、訓詁記誦の習のみ。(中略)所謂渙然水釋し、怡然として理順する者は、久しくして自ら之を得。偶然に非ざる也。(慎思錄卷之四)

○師曰く、讀書するに當りては、坐するに直を以てし、敬以て持し、心志をして寧靜に心平らかに氣定まり、端莊嚴肅以て聖賢に交はる如くせしめよ。此くの如くすれば、即ち其徹する所淺からず。或は放逸書に對し、冗忽書見すれば、乃ち或は睡を引き、或は見るも見えず。是唯讀書を以て人の爲にする也。讀法正しからずば、則ち徹透益なし。今の學ぶ者は、讀書を以て睡を祐け、讀書を以て人の毀りを充たす。豈實學ならんや。范陽の張氏曰く、論語を讀むに孔門聖賢に對する如くし、孟子を讀むに孟子に對する如くすと。謂ひ得て好し。(慎思錄卷之二)

○師曰く、讀書法は記誦博識を専らにすれば、則ち書を玩び志を失ふか

り。書を讀みて以て理を究むるは、當に之を身に體すべし。此くすれば、則ち學ぶの功は尤も大なるものなり。(空前)

○學は一也。而して等に三あり。初めに文を學び、次に行を學び、終りに心を學ぶ。然るに初めの文を學ばんと欲する、既に吾心に在れば、則ち終りの心を學ぶ。乃ち是れ學の熟せるなり。三有りて三無し。(言志錄)

○師曰く、學は必ず問ふに在り。問ふは必ず審かにするに在り、問はざれば、則ち新ならず。唯意見に従つて來る。人に先覺あり、知に聰明あり、義理に疑あり。乃ち議論細評し、其舊見を濯ぎ以て新意を來す。一日一日人間は、着するとの意志是れ新なり。須らく日用此の如く講習討論すれば、則ち學に益あり。(山鹿語類卷三十四)

- 一、學文は飯と心得べし。腹にあくが爲なり。かけ物などの様に人に見せんする爲にはあらず。
- 二、書物は金かしの帳のやうなるもの也。金なき人のもたらむは、溢紙なむほどの用にこそ。
- 一、學文はくさき者の様なり。とくとくさみを去らざれば用ひがたし。少し書を読めば少し學者臭し。餘計書を読めば餘計學者臭し。こまりものなり。
- 一、學文は置所によりて善悪わかる。臍の下よし鼻の先悪し。
- 一、學文は輕業のやうにするがあしし。輕業は人の目の下に見おろし、人の天窓をふむものなり。(三浦梅園)

附 録 終

大正四年五月二十八日印刷
 大正四年六月一日發行
 大正六年二月十日三版

(讀書法與附)
 (定價金六十錢)

著 作
 權 有

著 者	東京府下巢鴨村二六三九
遠 藤 隆 吉	
印 發 行 者 兼	東京府下巢鴨村二六五三
鹽 崎 覺 三 郎	
印 刷 所	東京府下巢鴨府二六五三
巢 園 學 舍 印 刷 部	

發 行 所
 (振替口座東京 二二〇〇〇番)
 巢園學舍出版部
 大 賣 捌 東 京 堂 上 田 屋

279
32

178

終

